

国立国語研究所学術情報リポジトリ

# 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いた「～ていく」「～てくる」構文の意味分析

著者	加藤 麟太郎, 藤井 聖子
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	1
ページ	273-281
発行年	2017
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00001482">http://doi.org/10.15084/00001482</a>

# 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いた 「～ていく」「～てくる」構文の意味分析

加藤 麟太郎（東京大学教養学部 学生）<sup>†</sup>  
藤井 聖子（東京大学大学院総合文化研究科）

## A corpus-based semantic analysis of the *-te iku* and *-te kuru* constructions

Rintaro Kato (University of Tokyo, College of Arts and Sciences)  
Seiko Fujii (University of Tokyo, Graduate School of Arts and Sciences)

### 要旨

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下, BCCWJ)を用いて「～ていく」「～てくる」構文の物理的移動の用法の意味分析を行った。焦点をあてた研究問題は、「～ていく」「～てくる」の前に共起する動詞の意味特性と「～ていく」「～てくる」構文の意味特性との関係は、どの程度規則的でありどの程度予測可能かという問題である。BCCWJからの「～ていく」「～てくる」構文の無作為抽出のうち、物理的移動を表す用法をそれぞれ 497 用例、580 用例抽出し、森田(1998)に基づく仮説を立て、意味コーディングをした。コーディングに基づく定量的予備分析において、まず多くの用例がある程度予測可能な規則的傾向を示すことが明らかになったが、本稿では、左記傾向の定量的分析の報告に加えて、コーパスにみられる例外的用例の方に着目し、例外的用例の定性的分析を示した上で、新たな意味分類を提案する。

### 1. はじめに

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下, BCCWJ)を用いて「～ていく」構文と「～てくる」構文の意味分析を行った。「～ていく」「～てくる」構文には、アスペクトの意味を含む様々な比喩的用法があるが、本稿では、物理的移動の用法の分析を報告する。

### 2. 分析手法

#### 2.1 「～ていく」「～てくる」構文の意味分類

本稿で扱う物理的移動を表す「～ていく」「～てくる」補助動詞構文は、「いく」「くる」の意味として字義通り物理的な移動を表している。本稿で「～ていく」構文と「～てくる」構文それぞれの意味特性として着目し分類するのは、「～ていく」「～てくる」の表す物理的移動と、その「～ていく」「～てくる」の前に共起している動詞（以下、 $V_1$ ）が表す事態との関係として解釈される意味である。

森田(1998)ではその関係を「動作・行為の順次性を表す」「平行して行うことを表す」「移動するときの状態を表す」「複合して一つの動作・行為・作用を表す」という特徴によって四つに分類している。以下は、森田(1998)の説明を基にそれぞれの意味に分類される基準となると考えられる特徴を示し、それぞれ名称をつけたものである。

#### ① 順次

$V_1$ の表す行為が完了した後に移動が起こる。

<sup>†</sup> kato-rintaro084@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

## ② 並行

$V_1$  の表す行為と移動が同時に起こり、何かを持ってまたは伴って移動する。

## ③ 状態

$V_1$  の表す行為が移動中の移動主体の状態や移動の手段を表す。

## ④ 一体

$V_1$  の表す行為自体が方向性のある移動を含意するものである。

2.2 「～ていく」「～てくる」構文の意味特性と  $V_1$  の意味との関係性に関する仮説

森田(1998)によれば、 $V_1$  の意味特性と上記①～④との関係性は以下の通りである。

- |                         |      |
|-------------------------|------|
| (1) 他動性あり・意志性あり・アスペクト瞬間 | → 順次 |
| 他動性あり・意志性あり・アスペクト継続     | → 並行 |
| 他動性なし・方向性なし・アスペクト継続     | → 状態 |
| 他動性なし・方向性あり・移動性あり       | → 一体 |

本分析では、上記(1)を、 $V_1$  の意味特性から「～ていく」構文・「～てくる」構文の意味特性を予測するための仮説と捉え、この予測がどの程度正確か、予測が外れる用例はどのようなものかをコーパス分析によって検証する。

2.3  $V_1$  の意味特性、及び、「～ていく」「～てくる」構文の意味特性のアノテーション

上述の意味分析を行うにあたり、コーパスから物理的移動を表す「～ていく」「～てくる」構文が使われている用例を抽出し、それぞれの用例に、 $V_1$  の「他動性」「方向性」「意志性」「移動性」「アスペクト」に関してアノテーションを付し、さらに、人が解釈する「～ていく」構文の意味（「順次」「並行」「状態」「一体」）に関してアノテーションを付した。

## 2.4 コーパス母集団と抽出用例データ

BCCWJ からの検索により無作為に「～ていく」、「～てくる」の用例を抽出した上で、人の意味解釈による人手で物理的移動を表す用例（500 近似値）を抽出した。「～ていく」は、検索で得られた 3500 用例のうち、物理的移動を表す「～ていく」補助動詞構文でないものを除き 497 用例を、「～てくる」は検索で得られた 2000 用例のうち、物理的移動を表す「～ていく」補助動詞構文でないものを除き 580 用例を抽出し、分析対象とした。

なお、「～ていく」、「～てくる」構文の無作為検索のコーパス母集団は、BCCWJ 中の以下コーパスである。書籍（1971～2005 年，22, 058 件，約 6, 270 万語），雑誌（2001～2005 年，1, 996 件，約 440 万語），新聞（2001～2005 年，1, 473 件，約 140 万語），白書（1976～2005 年，1, 500 件，約 490 万語），教科書（2005～2007 年，412 件，約 90 万語），広報紙（2008 年，354 件，約 380 万語），Yahoo!知恵袋（2005 年，91, 445 件，約 1, 030 万語），Yahoo!ブログ（2008 年，52, 680 件，約 1, 020 万語），韻文（1980～2005 年，252 件，約 20 万語），法律（1976～2005 年，346 件，約 110 万語），国会会議録（1976～2005 年，159 件，約 510 万語）。

### 3. 定量的予備分析の結果

ここでは、森田(1998)の示した  $V_1$  の意味特性と「～ていく」「～てくる」構文の意味との関係に実際の用例はどの程度当てはまり、どの程度規則的かということを調べる。 $V_1$  の他動性・方向性・意志性・移動性・アスペクトというそれぞれの意味特性と「～ていく」「～てくる」構文の意味特性との関係を集計し、それらについてカイ二乗検定及び残差分析を行った。

#### 3.1 他動性

表1  $V_1$  の他動性と「～ていく」「～てくる」構文の意味特性との関係

	いく				くる				
	順次	並行	状態	一体	順次	並行	状態	一体	その他 <sup>1</sup>
他動性あり	22	109	1	5	48	41		19	71
他動性なし	3		91	266	20		44	336	1

$V_1$  の意味特性と「～ていく」「～てくる」構文の意味特性について、森田(1998)の示した(1)の関係性が成り立つとすれば、他動性があるものは順次及び並行に、ないものは状態及び一体に分類されるはずである。「～ていく」のクロス表についてカイ二乗検定を行った結果、主効果が見られた( $\chi^2=454.245$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )。さらに、残差分析の結果、順次及び並行で他動性ありが期待度数よりも有意に多く、状態及び一体で他動性なしが期待度数よりも有意に多いことが分かった( $p<.01$ )。

「～てくる」のクロス表についてその他部分を除外してカイ二乗検定を行った結果、主効果が見られた( $\chi^2=316.240$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )。さらに、残差分析の結果、順次及び並行で他動性ありが期待度数よりも有意に多く、状態及び一体で他動性なしが期待度数よりも有意に多いことが分かった( $p<.01$ )。

#### 3.2 方向性

表2  $V_1$  の方向性と「～ていく」「～てくる」構文の意味特性の関係

	いく				くる				
	順次	並行	状態	一体	順次	並行	状態	一体	その他
方向性あり	1	9		268	2	11		355	71
方向性なし	24	100	92	3	66	30	44		1

方向性については、(1)の関係性が成り立つとすれば、状態に分類されるものは方向性がなく、一体に分類されるものは方向性があるはずである。「～ていく」のクロス表についてカイ二乗検定を行った結果、主効果が見られた( $\chi^2=447.569$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )。さらに、残差分析の結果、順次及び並行及び状態で方向性なしが期待度数よりも有意に多く、一体で方向性ありが期待度数よりも有意に多いことが分かった( $p<.01$ )。

「～てくる」のクロス表についてその他部分を除外してカイ二乗検定を行った結果、主効果が見られた( $\chi^2=457.960$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )。さらに、残差分析の結果、順次及び並行及び状態で方向性なしが期待度数よりも有意に多く一体では方向性ありが期待度数よりも有意に多いことが分かった( $p<.01$ )。

<sup>1</sup> 「～ていく」「～てくる」構文の意味が語彙特化性を示す特殊な用例で「やってくる」71例と「経由してくる」1例である。

### 3.3 意志性

表3 V<sub>1</sub>の意志性と「～ていく」「～てくる」構文の意味特性の関係

	いく				くる				
	順次	並行	状態	一体	順次	並行	状態	一体	その他
意志性あり	25	109	82	229	66	41	25	314	72
意志性なし			10	42	2		19	41	

意志性については、(1)の関係性が成り立つとすれば、順次及び並行に分類されているものは意志性があるはずである。「～ていく」のクロス表についてカイ二乗検定を行った結果、主効果が見られた( $\chi^2=23.009$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )。さらに、残差分析の結果、順次で意志性ありが期待度数よりも有意に多い傾向があり( $p<.1$ )、並行で意志性ありが期待度数よりも有意に多く( $p<.01$ )、一体で意志性なしが期待度数よりも有意に多いことが分かった( $p<.01$ )。状態については有意差がなかった。

「～てくる」のクロス表についてその他部分を除外してカイ二乗検定を行った結果、主効果が見られた( $\chi^2=50.691$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )。さらに、残差分析の結果、順次及び並行で意志性ありが期待度数よりも有意に多く( $p<.05$ )、状態で意志性なしが期待度数よりも有意に多いことが分かった( $p<.01$ )。一体については有意差がなかった。

### 3.4 移動性

表4 V<sub>1</sub>の移動性と「～ていく」「～てくる」構文の意味特性の関係

	いく				くる				
	順次	並行	状態	一体	順次	並行	状態	一体	その他
移動性あり		38	67	267	15	25	43	344	72
移動性なし	25	71	25	4	53	16	1	11	

移動性については、(1)の関係性が成り立つとすれば、一体に分類されているものは移動性があるはずである。「～ていく」のクロス表についてカイ二乗検定を行った結果、主効果が見られた( $\chi^2=247.867$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )。さらに、残差分析の結果、順次及び並行で移動性なしが期待度数よりも有意に多く、一体で移動性ありが期待度数よりも有意に多いことが分かった( $p<.01$ )。状態については有意差がなかった。

「～てくる」のクロス表についてその他部分を除外してカイ二乗検定を行った結果、主効果が見られた( $\chi^2=261.153$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )。さらに、残差分析の結果、順次及び並行で移動性なしが期待度数よりも有意に多く、状態及び一体で移動性ありが期待度数よりも有意に多いことが分かった( $p<.01$ )。

### 3.5 アスペクト

表5 V<sub>1</sub>のアスペクトと「～ていく」「～てくる」構文の意味特性の関係

	いく				くる				
	順次	並行	状態	一体	順次	並行	状態	一体	その他
継続	10	108	92	149	35	41	44	167	
瞬間	15	1		122	33			188	72

アスペクトについては、(1)の関係性が成り立つとすれば、順次に分類されているものはアスペクトが瞬間で、並行及び状態に分類されているものは、アスペクトが継続であるは

ずである。「～ていく」のクロス表についてカイ二乗検定を行った結果、主効果が見られた( $\chi^2=127.706$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )。さらに、残差分析の結果、順次及び一体でアスペクト瞬間が期待度数よりも有意に多く、並行及び状態でアスペクト継続が期待度数よりも有意に多いことが分かった( $p<.01$ )。

「～てくる」のクロス表についてその他部分を除外してカイ二乗検定を行った結果、主効果が見られた( $\chi^2=79.061$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )。さらに、残差分析の結果、並行及び状態でアスペクト継続が期待度数よりも有意に多く、一体でアスペクト瞬間が期待度数よりも有意に多いことが分かった( $p<.01$ )。順次については有意差がなかった。

### 3.6 予備分析の位置づけ

以上の結果は、「～てくる」構文で「順次」と「アスペクト瞬間」との関係において有意差が出なかったことを除けば、(1)の関係性を支持する結果である。このように、森田(1998)で示された(1)の関係性はある程度実際の用例に当てはまり、 $V_1$ の意味特性と「～ていく」「～てくる」構文の意味特性との間に規則性が認められることを確かめることができた。

しかし、以上の分析(検定)において、「～ていく」「～てくる」構文の意味特性を人が判断する際  $V_1$  を含める構文全体の意味解釈を含むという側面があり、その  $V_1$  の意味特性が「～ていく」「～てくる」構文の意味特性に影響を与えるのは当然のことと考えるべきである。

(即ち、従属変数と独立変数と間の独立性が確保されているとは言えないため、カイ二乗検定自体適切とはみなせず、規則性を予備的に確認する以上の意味はない。)従って、前出の分析を、(1)の関係性に則っている用例と則っていない用例とを仕分けした上で両者の分布を確かめる予備分析として位置づけ、本稿では、4節以降、例外的用例の分析に力点をおく。

## 4. 例外的用例の定性的分析

### 4.1 予測通りの用例と例外的用例との頻度分布

以下の表6は、縦軸に(1)の関係性に基づく「～ていく」「～てくる」構文の意味特性の予測を、横軸に実際の意味特性をとった「～ていく」「～てくる」それぞれの出現についての表である。

表6 「～ていく」「～てくる」構文の意味特性の予測と実際の意味特性の頻度分布

実 予測	いく				実 予測	くる				
	順次	並行	状態	一体		順次	並行	状態	一体	その他
順次	14	1		3	順次	26			5	71
並行	8	108	1	1	並行	21	41		13	
状態	2		91		状態	14		44		
一体				263	一体	2			336	
その他	1			4	その他	5			1	1

これらの表を縦方向に見ると、実際の意味特性が順次であるものの中では、森田(1998)で示された(1)の関係性に基づく予測も順次となっているものが最多であり、他の三つの意味についても同様である。表を横方向に見ると、「～ていく」「～てくる」構文の意味特性の予測が順次となっているものの中では、予測通り実際の意味も順次であるものが最多であり、他の三つの意味についても同様である。表6はタイプ数ではなくトークン数で集計したものであるが、 $V_1$ の意味特性と「～ていく」「～てくる」構文の意味特性との関係に関する森田(1998)の仮説は、「～ていく」では、497用例のうち95%以上にあたる476用例で正しく成り立っている。また、「～てくる」でも、580用例のうち約77%にあたる447用例で正しく成り立っている。しかしながら、実際の意味特性が順次・一体であるものについては、

仮説に基づく別の意味特性になると予測されていたものも少なからずある。

#### 4.2 コーパスに見られる例外的用例

ここでは、森田(1998)に基づく予測に当てはまらなかった例外的な用例を全てみた中で、その一部を取り上げて分析した上で、実際の用例に基づく新たな意味分析を試みる。

- (2) a. 私「この時間からだもん、いらないよ」ダ「帰り、店見ていくわ」私「いいって」

他動性	方向性	意志性	移動性	アスペクト	意味特性 <sup>2</sup>	予測
あり	なし	あり	なし	継続	順次	並行

【出典】『Yahoo!ブログ』(2008)

- b. さてと…ちょっと運動してくるかな。。

他動性	方向性	意志性	移動性	アスペクト	意味特性	予測
なし	なし	あり	なし	継続	順次	状態

【出典】『Yahoo!ブログ』(2008)

- c. 父が、「ちょっと、まさと出かけてくる」と母に言って、その小さな旅は始まる。

他動性	方向性	意志性	移動性	アスペクト	意味特性	予測
なし	あり	あり	あり	瞬間	順次	一体

【出典】徳光正行 (2003)『せんえつですが…。』幻冬舎。

森田(1998)に基づく仮説では (2abc) における「～ていく」「～てくる」構文の意味特性がそれぞれ並行・状態・一体と予測されるが、これらの用例の実際の意味特性は順次である。これらの用例に共通することは、別の文脈では予測通りの意味特性になることがあるということである。また、四つの意味特性のうち、順次だけが移動と  $V_1$  の表す行為とが同時に行われないという特徴がある。以上の二点から考えると、 $V_1$  の意味特性から並行・状態・一体と予測され、実際の意味特性も予測通りになることが多い場合でも  $V_1$  の表す行為の後に移動が起こる文脈で使われれば順次を意味することになり、順次になることを完全に予測することは不可能であるということが分かる。

また、予測が順次でないもののうち、移動主体が話者で、かつ、到着点が話者の位置の場合は順次になりやすい。このような用例は「くる」で 27 用例あり、そのうち 21 用例の意味特性が順次である。これは、出発点（話者の位置）から「どこか」へ行って到着点（話者の位置）に戻ってくるという移動を「～てくる」構文を使って表そうとする場合というのは、上記の「どこか」で何かをする目的をもって移動するケースが多く、特に移動主体が話者の場合は「どこか」で何をするのかを聞き手に伝える目的で「～てくる」構文が用いられるからだと考えられる。

- (3) a. 何を着ていくべきとは無いと思いますよ。

他動性	方向性	意志性	移動性	アスペクト	意味特性	予測
あり	なし	あり	なし	継続	並行	並行

【出典】『Yahoo!知恵袋』(2005)

- b. 早速明日も学校へ傘を差していくと思うので、もしよければ教えて下さい。

他動性	方向性	意志性	移動性	アスペクト	意味特性	予測
あり	なし	あり	なし	継続	並行	並行

【出典】『Yahoo!知恵袋』(2005)

<sup>2</sup> 「～ていく」「～てくる」構文の意味特性を指す。以下同様。

- c. 下地は自分が普段使用しているものを持ってくるように言われましたけど。

他動性	方向性	意志性	移動性	アスペクト	意味特性	予測
あり	なし	あり	なし	継続	並行	並行

【出典】『Yahoo!知恵袋』（2005）

「～ていく」「～てくる」構文の意味特性が並行と予測され、実際の意味特性も並行である用例の  $V_1$  は、(3)のように「着る」「差す」「持つ」などである。ここであげた実際の意味特性も並行となるような  $V_1$  は、他の動詞に比べて移動との両立がしやすいといえる。なぜなら、これらの動詞は「着る」「差す」「持つ」という動作を表すとともに、その動作を終えた後には「着ている」「差している」「持っている」という状態になっていることも表す動詞であり、「着る」「差す」「持つ」という動作をした後は移動するだけで二つの行為を並行して行っていることになるからである。しかし、移動と同時に起こっている  $V_1$  が表す行為が「着ている」「差している」「持っている」という状態ならば、その意味特性は状態とも捉えることができ一つに定めることができない。さらに、動作が完了した後に起こる移動と動作完了に伴って発動する状態が同時に起こるということで、順次の要素も入っているため、新たな意味特性を立てる必要がある可能性もある。

- (4) 集団が次々に響木とランニングシャツの男を追い抜いていく。

他動性	方向性	意志性	移動性	アスペクト	意味特性	予測
あり	あり	あり	あり	瞬間	並行	順次

【出典】斎藤純（2004）『銀輪の覇者』早川書房。

(4)は「～ていく」構文の意味特性が順次と予測されながら実際の意味特性は並行である用例だが、この用例は方向性のある移動を表しているため、一体の意味になる要件も満たしている。ここでは、追い抜かれる人を伴っている点を考慮して並行としているが、森田(1998)の意味分類では並行と一体が両立可能であることが分かった。また、この用例のように  $V_1$  の表す瞬間動作が移動中に起こる例を考えると、以下のようなものがある。

- (5) a. ボールを蹴っていく。  
b. 通行人から次々と財布を奪っていく。  
c. 彼はこちらに手を叩いてくる。

(5)はいずれも移動中に瞬間動作が繰り返し行われる例であるが、(5ab)はボールや財布を伴って移動していることから「～ていく」構文の意味特性が並行になる一方で、(5c)は何も伴っていないため、森田(1989)の並行の定義に則ると、状態となる。

- (6) 白いストリング・ビキニの少女が、ポルシェのハンドルを握った僕に手を振っていく。

他動性	方向性	意志性	移動性	アスペクト	意味特性	予測
あり	なし	あり	なし	継続	状態	並行

【出典】大石圭（2002）『殺人勤務医』角川書店。

(6)の「振る」については、移動と「振る」行為が同時に継続的に起こっており予測通り並行となるかと思われるが、森田(1989)で示された意味分類によると並行という意味特性は「何かを持ってまたは伴っての移動」を表すものであるため、移動主体が何も持っておらず伴ってもいないこの用例は、並行とはいえない。（このことが5節で述べる検討に繋がる。）



この用例で、移動主体が手を振った状態で移動していく様子を表しているという側面を捉えると、意味特性は状態である。

## 5. 新たな意味分類

以上のように、森田(1998)で示されている意味分類は、実際の用例と照らし合わせてみると一部ではあるが予測から外れた例外的な用例が見られ、また、識別すべき意味が捉えきれないという諸相が認められた。そこで、それらの点を考慮した上で、以下のような新しい六つの意味分類を提示する。

### ① 順次

$V_1$  の表す行為が完了した後に移動が起こる。

### ② 並行

移動とは異なる  $V_1$  の表す行為を移動中に継続的に行っている。

### ③ 反復

移動中に繰り返し移動と異なる  $V_1$  の表す瞬間動作を行っている。

### ④ 状態

$V_1$  の表す行為が完了した後に移動が起こり、移動中は  $V_1$  の表す行為の結果状態が継続する。

### ⑤ 手段

$V_1$  の表す行為が移動の様態や手段を表す。

### ⑥ 一体

移動することが  $V_1$  の表す行為を行うことにもなっている。

①順次に関しては定義が変わらず分類される例も変わらない。②新並行<sup>3</sup>は旧並行と定義が異なる。何かを持ってまたは伴う必要がなくなり、(6)の「手を振っていく」も新並行に分類されるようになる。③反復は、主に旧並行に分類されていたもののうち、移動中に瞬間動作を繰り返し行うものを独立させた。これにより、(5abc)は全て反復に分類されるようになる。④新状態には、(3)で触れた「着る」「差す」「持つ」などのほか、旧状態に分類されていた「座る」「乗る」なども分類される。⑤手段は、旧状態を細分化したもので、「歩く」「泳ぐ」などが分類される。⑥新一体は、旧一体と定義が異なり、旧並行と旧一体が両立可能だった点を改善するため、新並行とは両立しない定義になっている。旧一体に分類されていた「入る」「落ちる」などのほか、旧並行に分類されていた「追う」「連れる」などもこの分類になる。

## 6. おわりに

本稿では、 $V_1$  の意味特性と「～ていく」「～てくる」構文の意味特性との関係について、森田(1998)に基づく仮説を立て、コーパスから抽出した用例への意味コーディングに基づく定量的予備分析において、まず多くの用例がある程度予測可能な規則的傾向を示すことを確認した上で、例外的用例の量的・質的分析を行った。これらの分析を通して、例外的用例の中にも傾向を見いだすことができ、新たな意味分析への示唆を得ることができた。

<sup>3</sup> 便宜上、森田(1998)の分類と新たな分類とで名称が同じものに関しては前者に言及するときには旧を、後者に言及するときには新を付す。

## 謝 辞

本分析において、横山詔一氏（国立国語研究所教授，東京大学大学院総合文化研究科客員教授）の大学院講義に，教養学部の学部生である第一著者(加藤)の聴講を特別にご許可いただき聴講させていただいたことが大変有益であった。記して感謝申し上げる。

## 文 献

- Fillmore, Charles. (1997). *Lectures on Deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Kuno, Susumu. (1987). *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. Chicago: University of Chicago Press.
- Levinson, Stephen C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Martin, Samuel E. (1975). *A Reference Grammar of Japanese*. New Haven: Yale University Press.
- Shibatani, Masayoshi. (1990). *The Languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shibatani, Masayoshi. (2003). *Directional Verbs in Japanese*. In: Shay, Erin. Seibert, Uwe. (eds.) (2003). *Motion, Direction and Location in Languages: in Honor of Zygmunt Frajzyngier*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. pp.259-286.
- 金田一京助・山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄 (1997).『新明解国語辞典』第五版，三省堂.
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 (2000).『岩波国語辞典』第6版，岩波書店.
- 森田良行 (1998).『基礎日本語辞典』第八版，角川書店.
- 山口治彦 (2009).「視点の混在と小説の語り—自由間接話法の問題をめぐって—」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明(編)『「内」と「外」の言語学』pp.217-248，開拓社.
- 山下杉雄・村上公雄・塩谷善之・大西匡輔 (1998).『精選国語辞典』新訂版，宮地裕・甲斐睦朗監修，明治書院.
- 山田俊雄・築島裕・白藤禮幸・奥田勲 (2000).『新潮現代国語辞典』第二版，新潮社.

## 関連 URL

現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) [http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/)